



日刊 千葉労働動力

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号(動力車会館)
電話(鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 043(222) 7207 番

95.8.15 No. 4241

50回目の 8月15日にあたって

「過去はけっして死なない、過去は過ぎ去りさえしない」
——フォークナー——

五〇回目の八・一五を迎えたきよう、歴史認識という問題、過去を想起するということの意味について考えさせられます。

あの「戦後五〇年国会決議」、わずか三百字のなかに詰め込まれた山ほどの偽善……。

「世界の近代史上における数々の植民地支配や侵略的行為に思いをいたし、……」などというものの言い方は、過去を葬ろうという意図ぬきにできないことです。「誰にも責任がある」



「子供を抱いて眠る母」(ケチ・コルイツ)

ことは、「誰にも責任はない」ことと同じであって、敗戦を「終戦」、占領を「進駐」、侵略を「進出」と言い換えて、自らのした行為から、本来の歴史的な内容と責任を抜き去り続けてきた戦後日本の欺瞞を象徴するものです。

「決議」には、自らのした行為が侵略戦争であったことについての明確な承認もなければ、戦後日本の五〇年間にアジアからの収奪によって「繁栄」を謳歌してきたことについての自覚もありません。当然のことながら、このような歴史を断ち切り、新しい歴史を創りはじめられることへの決意も、どこにも語られてはいません。

全ての者は、歴史によって生みだされ、歴史によって制約されると同時に歴史に支えられて生きています。自らが、歴史によつて制約され、拘束された存在だという明確な認識・自覚のないところに生まれてくるのは、かつての亡霊だけです。

「過去がその光を未来に投げかけるのをやめたので、人々の精神は暗がりのなかをさまよっている。」
——トクヴィル——

また「国会決議」は、「過去の戦争についての歴史観の相違を超え、歴史の教訓を謙虚に学び、……」と言います。かつての侵略戦争は、あらゆる

る価値が天皇(国家)を源泉として、そこから流れだすものとされ、国民は、国家の決定した価値を実践することによつてのみ価値をもつことができることとされた皇国史観のもとに、「欧米列強に抗し、東亜の新秩序をつくるためのアジア解放戦争」として遂行されました。

しかも、これは過去のことではありません。一六〇名もの国会議員が参加している「終戦五〇周年国会議員連盟」は、その活動方針で、「戦後占領政策および左翼勢力の策動による一方的なわが国に対する断罪と自虐的な歴史認識を正し、日本と日本人の荣誉と誇りを回復させ」「昭和の国難に直面し、日本の自存自衛とアジアの平和を願って尊い生命を捧げられた二百余万の戦没者を追悼する」と語っています。かつてと寸分違わない歴史観をかざしているのです。

一体どうして、このような人々と「歴史観の相違を超え、歴史の教訓を謙虚に学ぶ」ことができるというのでしょうか。歴史観の転換、価値観の転換のないところに、不戦の決意など生まれてこようはずがありません。

「五〇年決議」は、「過去がその光を未来に投げかける」のを自ら断ち切ってしまったようなものです。トクヴィルは、「人間の精神は暗がりのなかをさまよっている」と結んだ著書の序文で、「新しい世界のために、政治の新しい学が必要である」と記しましたが、われわれ

は、「新しい世界のためには、労働者の新しい闘いが必要である」と声高く言わなければなりません。

「人間の行いは、記憶にとどめられることがないかぎり、地上で最も虚しく最も移ろいやすい営みである」
——ハンナ・アーレント——

「決議」は、空疎に「恒久平和の理念」「人類共生の未来」を語ることで結ばれています。しかし、かつての行いを記憶にとどめようとしなければ、か、意図的に糊塗した上に語られた「恒久平和の理念」や「人類共生の未来」など、「地上で最も虚しく移ろいやすい営みである」と言うほかありません。戦争は、つねに「平和」の名のもとにはじめられるのです。

「歴史は時代とともに書き換えられる」……。時代の大きな変化に遭遇したとき、過去を見る目はもはや同じではありません。歴史解釈とは、現在の鏡にほかなりません。「五〇年決議」における歴史認識は、われわれが今立っているこの時代が、どのような方向に舵を切ろうとしているのかを象徴しているといえます。

われわれは、五〇回目の八月十五日にあたって、昨年来開始した、労働運動の新しい潮流をつくりあげる闘いを全力で進めることを決意します。